

詩の同人誌をよくもろうが、読むこ  
ギ詩を一編。

とはとても困難だ。鬼面人を驚かす誌  
が多くて、おかげで一向に驚かない。

それにしても、それらは今日の文学現

象の共通性の一端を示すことは誰か

だ。たとえば

こんな長い題

名の詩誌を最

近もらった。「地獄第七界に君臨す

る大王は地上に顕現し、人体宇宙の中

枢に大洪水をもたらすであろうか」。

何が言いたいのかとヤユするかわり

に、心情を汲んで、同誌からのツギハ

「憧れて風雪数千年の都市に至って

みれば今まさに時代は肛門期である。

人の子が空から不時着したというプラ

トン期の伝承を思い出させる二つの丘

の間で目覚めたおれ

は、天使への変身を

夢みて諸神滲滯の天

地ベナレスへ、言霊の背に乗って旅立

つ。ついにおれは危険な儀式を執り行

う祭壇の前へ攻め入り、泡立つ血の中

に立って、サド神の如く血と鞭の饗宴

の主人にして殉教者となり、外売郎の

稚児の戯れと見まこつ福楽を享受し、

絶対の大理石に蒼白の恥辱を描くだろ

う。かくて数千の少年を殺したおれ

は、錬金術師よろしく黙示録の至上天

に昇って失神するだろう……」

そして編集後記——「このちんまり

した詩人の多い時代に、われらの尖鋭

的な作品言語は空飛ぶガレル船とな

って白鳥のように天翔けるだろう。あ

あ、光ノ、光ノ——ここで陰の声——

「言霊の術が破れて落下する時がこわ

いと言いたいが、飛びあがりもしな

い」

(ニセ詩人)

## 詩の同人誌